小学生　特選

ぼくにできるバリアフリー

所沢小学校四年　井上　晴馬

四年生になって、ぼくは自分の目に色覚異常があることを知りました。色覚異常とは、色の区別がつきにくいことです。それまで自分の目に異常があることに気づいていませんでした。眼医者の先生には、

「しょう来、選べなくなっちゃう仕事があるからね。」

と言われました。

色覚異常がわかってから、ぼくは少しずつ障がいのある人についてきょう味を持つようになりました。今年の夏休みには、パラリンピックの選手が行っているバリアフリーの体験会にさん加しました。そこでぼくは、競技用の車いすに乗って車いすバスケの体験をしたり、アイマスクをして目が見えない人のい動の方法を体験しました。中には、足が動かなくても両手だけで運転できる車に乗る人や車いすから自分の力で車に乗りうつったあと、最新の技じゅつで車に車いすをつみこむ人もいました。どの人も障がいがあっても、技じゅつや工夫で楽しそうにスポーツをしていました。マックさんというパラパワーリフティングの選手が、

「むずかしそうなことも工夫を一つ加えるだけで、バリアフリーが実げんできる。そこに周りの人の助けが加わったら、もっと生活しやすくなる。こまっている人を見かけたら声をかけてあげてね。」

と教えてくれました。

ぼくには色覚異常があるけれど、ぼくにしかわからないこともあります。町の信号機の赤色の中には、色覚異常の人にしか見えない×印が書いてあります。ぼくは当たり前と思っていたけれど、それをお母さんに言うとお母さんには見えないと言っていたのでおどろきました。赤の色がわかりにくい人にも、進んではダメということを知らせるための工夫です。その他にも、町の中には、いろいろな人が便利にくらせるような工夫がたくさんあります。例えばぼくの家の近くにも、目が不自由な人のための点字ブロックや、音の鳴るおしボタン信号があります。町を走っているバスには、車いすが楽に乗りおりできるようにスロープがついていたり、スーパーの駐車場には、車いすの人がドアをいっぱいに開けて車に乗るための幅が広い駐車場があります。でも、バリアフリーの工夫がしてあっても点字ブロックの上に自転車をとめてしまったり、車いす用の駐車場にふ通の車をとめてしまったら工夫の意味がなくなってしまいます。マックさんが教えてくれたように、みんながバリアフリーについてきょう味を持って少しずつ周りの人と助け合えば、どんな人も住みやすい世界になっていくと思います。

ぼくのゆめはけいさつ官になることです。最近まで色覚異常の人はけいさつ官になれなかったそうです。でも一人の眼医者さんが色覚異常の人への差別をなくしたいと活動してくれて、今は色覚異常のある人でもけいさつ官になれるようになりました。その人も、他の人のことを考えて行動して、色覚異常の人たちのバリアをなくしてくれました。

ぼくはまだ町でこまっている人に声をかけたことがありません。時々、白いつえをついている目の見えない人や車いすに乗っている人を見ることがあるけれど、きんちょうして自分から声をかけることができません。でもこれからは、こまっている人を見たら、

「何か手伝えることはありますか。」

と話しかける勇気を持って、少しずつバリアフリーの輪を広げていきたいです。

ぼくの知らなかった日じょう

北秋津小学校四年　小川　咲士

ぼくは、じゅ業で身近に色々な福祉があることを学びました。バリアフリー・手話・ユニバーサルデザイン・ほ助犬など日じょうで目にしている物やあまり見かけない物など様々でした。当たり前に見ている物の中にも福祉はたくさん使われていて、例えば、エレベーター、点字や手すり、スロープ、音声案内などなにげなく使っていた物の中に工夫がたくさんありおどろきました。

学んだことの中に、ほ助犬がありました。ほ助犬の中には、目の不自由な人の役に立つもうどう犬や、聴覚にしょうがいがある人の役に立つ聴どう犬、手足にしょうがいがある人の役に立つ、かい助犬などがいます。テレビなどで見て、もうどう犬は知っていましたが、聴どう犬やかい助犬は知りませんでした。もうどう犬一ぴき育てるのにも、たくさんのお金と時間がかかると聞きました。聴どう犬、かい助犬を育てるのも大へんだと思うけど、ほ助犬を必要としている人たちにとどいてほしいです。

次に学んだことの中には、手話がありました。手話は聴覚や口にしょうがいがある人が使う言葉です。手の動きの組み合わせで気持ちを伝えます。

じゅ業で手話を使っている人に関するえいぞうを見ました。手話を使っている人が図書館で係の人と筆談で話そうとしたら、係の人に今度話せる人と来てくださいと言われてしまいました。なぜそのような対おうをしたのかわかりませんが、どんな場所でも人それぞれに対おうできる社会になってほしいです。この間、洋服屋さんでたぶん聴覚にしょうがいがある人がスマートフォンの画面を店員さんに見せてしつ問をして、店員さんがタブレットの画面で答えていました。身近にあるべんりな物を使って、どんな人とでも会話ができるのはとてもいいことだと思いました。聴覚や口にしょうがいがある人もない人も会話をすることは特別なことじゃないと思います。

次に、じゅ業で聞いたのは車いすを実さいに使っている方のお話でした。その方の話の中でいんしょうにのこったのは、エレベーターに乗るのに二時間かかったことがあるという話でした。その時は信じられないと思い、出かけるのがいやになるのではないかと思いました。そういう思いをする人が少しでもへるように自分にできることはないかと考えました。白じょうの人がこまっていたら手伝いが必要か聞いてみたり、車いすの人や、足の不自由な人、ベビーカーをおしている人のためにエレベーターをできるだけ使わないで階だんを使ったら自分の運動にもなり一石二鳥だと思いました。

福祉のじゅ業を受けて、今まで知らなかったことを知り、考える機会になりました。大切なことはげんじょうを知ることだと思います。直さなくてはいけない所は直し、せつびなど必要な物は街全体で作っていき、どんな人でも楽しくお出かけができる街になってほしいです。

ももものおじちゃん

東所沢小学校六年　菊地　快晴

ぼくの親戚に、福島で農家をやっているおじちゃんがいます。そして、ぼくはそのおじちゃんをももものおじちゃんと言っています。

おじちゃんは、もも、お米、ミニトマトなど色々な果物や野菜などを育てています。八十八歳のおじちゃんは、元気でとてもパワフルな人です。昔、電話でサクランボが食べたいと言った親戚に、枝ごと切って福島から山形まで車でとどけたそうです。

そんなおじちゃんですが、去年、がんになってしまいました。でも畑に出ると病気がうそみたいに、元気に働いていました。入院する前もお米を植えていて、ぼくはそのお米が秋にできるのをとても楽しみにしていました。ですが、お米ができる前に、おじちゃんは亡くなってしまいました。

おじちゃんが亡くなる前に育てていた、ももの収穫に、今年の夏休み家族みんなで行ってきました。今まで二個三個しかとっていませんでしたが、今回は、木三本分約二百個のももをとりました。一生けん命お世話した木は、沢山のももがなっていてとてもきれいでした。ももは、周りの皮にチクチクとしたうぶ毛が生えています。さわるとかゆくなるので軍手をして採ります。強くつかんでしまうとキズがつくのでやさしく持ち、ひっぱります。次に、採ったももの大きさ、キズなどを確かめます。ぼくが見ただけではきれいに見えても中の種が割れたりしているものもあるので、おばちゃんに聞きながら分けました。その後は、くさっているももを捨てて箱に入れます。

ぼくはももを採っているだけでも暑くて本当につかれました。なので、いつも笑いながらやっていたおじちゃんが、改めてすごいと思いました。おじちゃんが育てたももは、とてもあまくて本当においしかったです。そして、おじちゃんにもう会えないと思うと、とてもさみしい気持ちになりました。けれども今は、亡くなるまえに植えてくれたお米が育っています。秋に実ったお米を大切に大切に感謝して食べたいと思います。おじちゃんは亡くなってしまったけれど、残してくれた、ももの木は、ずっとずっとあるので、また来年の夏も木にももが実っていたら、家族みんなで採りにいきたいです。

会える回数は少なかったけど、色々な事をたくさん教えてくれたもものおじちゃんが、これからもずっと大好きです。

小学生　金賞

ぼくのゆめ

美原小学校三年　安中　基晴

ぼくは、お話を聞いたり漢字をおぼえたりするのが少しにがてです。お話はちゃんと聞こうと思っていてもちがうことを考えたり、体が動いたりして、いつもおこられてしまいます。漢字はれん習してもなかなかおぼえられなくて、いやになってしまう時があります。でもぼくは楽しいことや面白いこと、外で遊ぶのが大すきで、ずっとこのままがいいなと思っています。でも本当はどうしたらよいのか分かりません。お母さんは漢字も計算も大人になってもひつようだからやっておいた方がいいよと言います。でもぼくは、その「ひつよう」というのがまだよく分かりません。何でそんなにするんだろうと思ってしまいます。それだったら子どものままでいいやと思ってしまいます。そしてぼくは、はじめての場所や食べ物、あと、思った通りにならないとイライラしてしまいます。だからぼくは、お母さんたちが思う大人になれるのかな、なれなかったら悲しむのかなというふあんもあります。でもこの前ぼくは、大人になる楽しみを見つけました。

ぼくは、今年の夏休みにおばあちゃんといっしょにカレーライスを作りました。カレーにはおじいちゃんのはたけでとれたじゃがいもやたまねぎをたくさん入れて、ぼくはかくし味に使うなしをすりおろしました。すりおろす時、なしがすべってつめがいたくなったりしましたが、一生けんめいすりおろしました。おばあちゃんが、えがおで、

「もとちゃん、おりょうり上手だね。」

とほめてくれて、とてもうれしくなりました。出来上がってぼくはドキドキしながら食べてみると、お母さんが作ってくれるカレーと少しちがっていつもよりあまく感じました。かくし味のなしのおかげかもしれないけど、みんなのえがおとうれしい気持ちがまざってあまくなったのかなと思いました。このカレーは、ぼくの夏休みの思い出の味になりました。そしてぼくは、お父さん、お母さんに思い出の味ってあるのかなと思い聞いてみようと思いました。はじめにお父さんに聞いてみると、全く思い出せないみたいで

「うーん。」

とだまってしまいました。そしてしばらくしてから、

「ひいおばあちゃんのおしるこかな。」

と言いました。なぜかと聞くと、

「あまくて、温かくて、とても大すきだった。」

とやさしく言いました。次にお母さんに聞いてみました。お母さんはすぐに、

「バウムクーヘンかな。」

と言いました。またなぜか聞いてみました。お母さんがひとりぐらしをはじめて、はじめてむかえたたん生日の時、おばあちゃんから送られてきたバウムクーヘンを一人さみしく食べていた時、なみだがあふれてしょっぱい味になったそうです。でもお母さんは、あの時のバウムクーヘンはあまくてしょっぱかったけど大切な味で、思い出すたびにがんばらなくちゃとはげまされるそうです。

ぼくは、今のところ夏休みのカレーが思い出の味ですが、大人になるまで思い出の味はいくつふえるのかな。しょっぱいのかな、あまいのかな、それともからいのかな。そしてそれはどんな出来事といっしょにその味はくるんだろう。そう思うとぼくは大人になるのが少し楽しみになりました。思い出の味というのは、やさしい色につつまれていて自分の心の中にずっとあって、自分を元気にしてくれたり、そばにいてくれたり、何だかふしぎな味なんだと思いました。ぼくがどんな大人になっていくのか分からないけど、このふしぎ

な温かい気持ちを大事にした大人になりたいです。大人が考えるゆめとは少しちがうかもしれないけれど、ぼくにとっては大切なゆめになりました。

障害者でも同じ人間

明峰小学校四年　佐竹　穂海

わたしには、障害がある姉がいます。その病気の一つに知的障害があります。かんたんに説明すると、相手の言葉がよく理かいできない。人にうまく伝えることが苦手。言われたことを同時にすることがむずかしい。このような特ちょうがあります。また、体にも少し不自由さがあり足の動きが悪く、階だんの上り下りが苦手です。

ふつうの人とちがって、姉は一人ではできないことが多いです。でも周りの人にたくさん助けてもらっています。例えば、学校の先生やお友達または近所の方に助けられています。なので姉は安心して生活することができています。そのことがわたしはとてもうれしいです。

みなさんは「きょうだい児」という言葉を知っていますか。私のような兄弟に障害があるきょうだいのことを言います。ふつうの兄弟とちがって、わたしは妹ではありますが姉の立場になったりします。なぜならわたしのほうができることがふえてきているからです。うちでは年れいに関係なく、できる人ができない人をサポートすることが当り前です。でも、知的障害があっても姉はやさしい所があり、わたしを助けてくれる時があります。姉に障害があって大へんな時もありますが、一しょにいると、とても楽しいです。周りから見たらちょっと変わった兄弟に思えるかもしれませんが、わたしにとってはこれがふつうです。

まだまだ社会は、障害がある人や自分が知らないことについて理かいがないことがあります。わたしは姉を通して、いろいろな人間がいることやこまっている人に気づくことができるようになりました。母から、それは姉がいるから気づけたんだねと言われて自分は姉がいるから気づけたんだと思うと、とってもうれしかったです。これからもいろいろな人に気づかいができるやさしい人になりたいです。そして、母みたいな障害の人をささえられて安心できるような社会になるように自分もがんばりたいです。また父のように少しのことでは負けない強い心をもてるようになりたいです。

最後に、これからの社会が障害がない人もある人もおたがいが助け合えたり、小さい子どもやおとしよりも安心して生活ができるようにしなければいけないと思います。わたしの姉も少しずつできることがふえ、自立にむけてがんばっています。なので、姉を目の前からおうえんして、姉もたくさんできることがふえたらとても良いなと思います。そしてみなさんにも姉、障害の人を温かい目でおうえんしていただけたらうれしいです。これからも助け合ったり、教えたり、姉のためになることをがんばりたいです。

全部の文章をまとめると、書いているわたしまでやっぱ障害って大変だなって思いました。勉強だっておぼえるのは大へんなのに、にげずに一生けんめいがんばってそれでも分からない時は聞いて「あ、そうなんだ」とし んけんに言っておぼえようとしている力を、私は姉をとてもそんけいします。私もその力を見習って勉強がたくさんできるようになって、たくさん教えてあげたいです。最後に、これからも姉が安心して楽しくなれるように、がんばりたいです。

今出来ること

中富小学校五年　松本　凰佑

ぼくには九十四さいのひいおばあちゃんがいます。ひいおばあちゃんは、以前は、福井県に住んでいました。しかし認知症になりお金の管理や身の周りのことを自分ですることがむずかしくなりました。なので今は、石川県に住む祖父母といっしょにくらしています。

ひいおばあちゃんが認知症になって変わったところが大きく三つあります。

一つ目は会話です。祖父母の家はぼくの住む埼玉県からは遠いので長い休みの時にしか遊びに行けません。久しぶりに会うといつも

「おうすけちゃんは、何年生だっけ。」

と聞かれます。認知症になってからは、同じことを何度も聞いてくるようになったり、最近言われたことや変わっていくものを忘れてしまうようになりました。例えばぼくの年れいや学年です。多い時には一日十回ほど聞かれます。

二つ目は家のことです。ひいおばあちゃんが以前住んでいた家には広い畑があり、認知症になるまでは野菜をたくさん育てていました。例えば、カボチャやトマト、ナスなどです。そしてその野菜をしゅうかくさせてくれました。その畑には虫やかえるがたくさんいました。妹といっしょにかえるをつかまえて遊んだりもしていました。今年、ひさしぶりに、ひいおばあちゃんの家に行ってみました。今はだれも住んでいないので畑にはたくさんのざっ草が生え、かえるが一匹もいなくなり、あれ果てていました。そんな様子を見てびっくりすると同時に少し悲しくなりました。なぜなら少しの間だけど、思い出は色々とあったからです。おはか参りに行った時、ひいおばあちゃんは泣いていました。ぼくよりもっとたくさんの思い出があったからだと思います。でも悲しいけれど認知症のひいおばあちゃんが福井県の家にもどることはもうできないと思います。

三つ目は、ひいおばあちゃんが作っていた梅ぼしです。その梅ぼしは、ぼくが小さいころから食べていた大好きな梅ぼしです。その味はすごくすっぱくてそのまま食べても、おにぎりにしてもとってもおいしいです。なのでいつもおべんとうに入っていました。しかし、認知症になって梅ぼしを作ることができなくなってしまいました。なので、今びんに保管されているのが最後です。もうすぐ食べられなくなると考えると、さみしく悲しくなりました。

ひいおばあちゃんは、認知症になって色々できなくなってしまったり、変わったりしました。でも体は元気でいつも明るいです。家のそうじをしたり、散歩をしたりして毎日生活をしています。それでもやっぱりできないことはふえてきてしまっています。だからこそ、ひいおばあちゃんのためにぼくがやってあげられることがないか、考えていきたいです。

追い続ければ、きっと

北秋津小学校六年　丸山　真璃

私のしょう来の夢は、バスケットボール選手になることです。いつか日本代表になってオリンピックに出場し、金メダルをとりたいです。なぜなら、オリンピックやワールドカップ、アジアカップなど様々な試合を見て、素晴らしいプレーにあっとうされたからです。また、自分の好きを仕事にするというのは難しいことであり、とても素晴らしいことに気づかされたからです。

私は、３Ｐやミドルシュートを武器としたディフェンスもスピードも速いガードになりたいです。私のあこがれの選手は３Ｐも入り、ディフェンスもスピードも速く、チームに流れを引きよせるプレーがとてもみ力的です。

自分には、ほど遠い存在ですが、少しでも近づ

けるように意識していることが三つあります。一つ目は、「あきらめない」ということです。スポーツの世界でもどんな世界でも逃げだしたい、もうやめたいと思うことがあると思います。そんな時私は、自分の好きな選手と自分が同じコートの上でプレーしている様子を思いうかべます。すると、心の中には「もっとがんばらなきゃ」という気持ちにあふれかえります。自分が良くない状態の時、私は、一からやり直すチャンスだと思っています。

二つ目は、「努力」をするということです。私は「雨降り族」という話を聞いて、努力することの大切さを知りました。雨降り族はおどると必ず雨が降るのです。なぜなら、雨が降るまでおどり続けるからなのです。このお話から、夢を追い続けるという思いを学べたと思います。日々の少しの努力の積み重ねから、叶う夢があると信じています。

三つ目は、「全力を出し切る」ということです。私は自分に自信がなく、積極的にプレーすることができない時があります。そして、コーチにアピールしたり、自分で自分の成長が見られないのです。全力を出し切れないとデメリットが多いのです。これから、プロを目指していく上でコートの上でアピールすることがとても大切です。そのためにも今から自分自身が全力を出し切れる方法を見つけていきたいです。

ところで、今の自分と昔の自分を比べると、たくさん成長した部分があると思います。それでも、たくさん足りない部分もあると感じています。例えば、チームを盛り上げる力や流れを引きよせる力など足りない力がたくさんあると感じています。今、自分がげんかいの力だとは思いません。今の自分を越えられるようにしていきたいです。未来には、自分のあこがれの選手とコートの上で一緒にプレーをして、自分の強みを思いっきり発きできるようにしたいです。

このように、今、私は自分の夢に全力で向き合っていると中です。自分は今、夢が明確になって、やっとスタートラインに立てたのだと思います。これから、ゴールテープに少しでも近づけるように、「あきらめない」、「努力」、「全力を出し切る」ということを忘れずに自分らしく突っ走っていきたいと思います。シュートやディフェンス、プレー以外の所でもたくさん成長して、みんなをあっとうできるような、唯一無二の選手になりたいです。

来年もまた、この場所に

東所沢小学校六年　神谷　心咲

私はこの夏、四十周年という歴史がある、「所沢サマースクール」に参加しました。母も子どものころにサマースクールに行っていたので、同年代の母と同じ経験ができることをとてもとても楽しみにしていました。

今回、私が宿泊した施設は、栃木県にある築八十年余りの木造一階建てのはい校「星ふる学校くまの木」です。そこは田んぼや山々に囲まれ自然があふれていて、まるで「となりのトトロ」に出てくるような世界観でした。毎日午前、午後のプログラムを自分で選択して遊び、夜は以前教室だった畳部屋で班ごとにしゅうしんします。プログラムは山、川、どうくつ探検、水鉄砲、カレー作り、ミサンガ作りなどなど豊富なバリエーションであきることなく満きつできます。短剣

そして、このサマースクールには中高大学生のお姉さん、お兄さん、加えて大人の「リーダー」がいてボランティアで参加してくれています。何ヶ月も前から準備やミーティング、さらには、私たちがねた後もバタバタと忙しそうに動いてくれていました。サマースクールが楽しいのはリーダーたちの努力のおかげです。のどがかれるまで盛り上げ、頑張ってくれたリーダーたちには感謝の気持ちでいっぱいです。また、私たち小学生は申し込んでも参加できるのは半分以下で、そのわずかな枠の中に入れたことすら幸せでした。去年は落ちてしまったので、今回通知が来た時にはすごくうれしくて、まだ先だというのにワクワクしていました。ですが、家族とはなれて一週間も過ごすのです。サマースクールが近づくにつれ徐々に不安になっていきました。出発前となると心細くて仕方がありませんでした。けれど、始まってみると不安が一気に消え去り、日を重ねるごとにリーダーやみんなと「仲間」として心から楽しめるようになっていきました。

特に心に残っていることを二つ紹介します。一つ目は「電気が使えない日」があったことです。自然に囲まれた場所ならではの取り組みで、苦しいこともありましたが、いつも当たり前に使っている電気のありがたさを改めて実感することができました。二つ目はボルダリングに挑戦したことです。ボルダリングといっても公園にあるようなものではなく、一番高いものだと九メートル。体育館の天井までも届きます。最初はこわくて様子を見ていた私でしたが、今までと違うことにチャレンジするのがサマースクールです。思い切って挑戦してみることにしました。下では仲間が「がんばれ！」と応援してくれています。その声援に背中を押されて、てっぺんまで到達することができました。地面に降り立った瞬間、仲間たちがかけ寄ってくれて、すごく温かい気持ちになりました。今ここにいるみんなも、もうすぐバラバラになってしまいます。けれど、その限られた時間だからこそ、小さな一つ一つの出来事が大切な仲間との思い出になっていったのです。

「もう一週間」とも「ようやく一週間」とも感じるような、夢のようで夢じゃない、充実した毎日を送りました。普段の生活では体験できないようなことや、自然と共存することの意味も知りました。この貴重な経験を忘れずに日々役立てていけると良いと思います。今回とは違う立場の中学生リーダーとして、来年もまた所沢サマースクールに戻ってきたいです。

小学生　銀賞

わたしのおばあちゃん

美原小学校三年　伊藤　美佳

わたしのおじいちゃんとおばあちゃんは、所沢から二時間はなれた、まつぶしというところに住んでいます。三年前におばあちゃんがびょう気でたおれて歩けなくなりました。でも、食よくがすごくよくて、顔色もいいのでよかったです。おばあちゃんは、リハビリの先生といっしょにつえをもって、歩けるようにがんばっています。おばあちゃんは、毎日げんまいを食べているので、今はすごく元気です。

おばあちゃんのおせわはおじいちゃんがしています。おじいちゃんがおせわをする所を見て、たいへんそうだなと思いました。おばあちゃんが元気なときには、海や動物園につれていってくれたり、カレーライスやあんこたっぷりのおはぎをつくってくれたり、とてもやさしくしてもらいました。そんなおばあちゃんが歩けなくなってしまって、かわいそうだなと思いました。わたしがまつぶしにいったときには、おばあちゃんのおせわをしようと思いました。

びょう気の人たちにはどうすればいいのかなとずっと考えていました。そのとき気がつきました。わたしには、おばあちゃんをかえたりトイレのお手つだいはむずかしいけれど、アイスノンをとりかえたり、水をとってあげたり、話相手になってあげたりすることはできるかなと思いました。そして昔、お母さんがかんごしをしていましたので、お年よりにどういうふうにおせわをしたらいいのかをアドバイスしてもらいました。なるべく、わたしがいっしょにつき合ってあげたら、おばあちゃんももっと元気になるかなと思いました。

そして次の日わたしは、おばあちゃんのそばで絵本を読んであげました。また、おり紙をおってあげました。そしたらおばあちゃんが

「ありがとう。心が温まるよ。」

といってくれました。そのときわたしはこう思いました。おばあちゃんこんなによろこんでくれたんだと、すごくうれしかったです。おばあちゃんに長生きしてもらいたいと思いました。

わたしは、やさしいおばあちゃんが大すきです。おばあちゃんは、

「みかはやさしいね。かんごしさんに向いているよ。」

と言ってくれます。かんごしさんは、やさしくて人のやくに立てる仕事だと思います。わたしにできるのかなと思いました。

わたしは、びょう気の人たちをまもりたいと思いました。お母さんも、わたしと同じように思ってかんごしさんになったのかな、と思いました。

しょうらいのゆめは、かんごしさんにしました。やさしいかんごしさんになりたいです。これからも、おばあちゃんによろこんでもらえるようにおせわをしたいと思います。

ヘアドネーション

美原小学校三年　岡本　翠

私は、ヘアドネーションをしました。ヘアドネーションは、かみの毛を切ってきふすることです。切ったかみの毛は、ジャーダックというところにおくります。そして、びょう気でかみの毛がなくなった人にかつらを作ります。

私が、ヘアドネーションをしようと思ったのは、びょう気の人にかみの毛をあげて助けたいし、それにかみの毛が長くなっていたので少し切ろうと思っていたからです。

ヘアドネーションは、ゴムでむすんでからかみの毛を三十センチメートル切ります。かみの毛を

切る時は、かみの毛が短くなるのでさみしい気持ちと、切った後の私が好みの自分じゃなくなったらどうしようという心ぱいの気持ちでした。かわいくないと、はずかしいし、わらわれたりするかもしれないと思ったからです。でも、かみを切った自分を見たらかみが短い自分も少しかわいくていいかも、と思いました。なぜなら、私がびょう気でかみの毛がなくなった人と同じだったら、はずかしいし、いやだろうと思うからです。でもかつらがあったら、安心して学校に行けるしあそんだりべんきょうしたり、できると思います。そのかつらが私のかみの毛だったら、こまってた子がえがおになってくれてうれしいです。

私は、ヘアドネーションをしたことから、切ったかみの毛が、かつらになってびょうきの子にとどいて、かつらをかぶって自分らしくたのしくかわいく思い通りに生きていけるお手つだいができるということを学びました。

またかみの毛がのびたら、ヘアドネーションをしてだれかがえがおになれるようにしたり、びょう気の子や、にんぷさん、目の見えない人がいたら、家族や友だちといっしょに、

「だいじょうぶですか？」

ときいて、お手つだいをしたり助けたいと思います。それで、その人がわらってくれたらうれしいです。

世界一の家族

山口小学校三年　小林　十和子

私の家族は、父、母、姉、そぼの五人で、私には姉がいます。姉はやさしいけれど、おこるとこわいです。ゲームやブロックで遊んでいる時は、やさしいです。あと、あまったおやつなどをゆずってくれることもあるので、そんな時はうれしいです。私は、姉はすなおだとおもいます。なぜなら、私がやりたい遊びで姉がやりたくない遊びをやろうというと、姉は

「いやだ。」

と言います。それで、私は姉はやりたくないんだなとわかります。私がやりたくて、姉もやりたい遊びだと、

「いいよ。」

というので、私は姉はすなおだなと思います。私は姉がいないと毎日すごせないなと思っています。姉がいないと、遊ぶ人がいなくて、とてもさびしいからです。

私の母はやさしいと思います。なぜなら、私が姉とケンカをしたとき、おこるからです。なぜ母がおこるのか考えてみました。そこで私は、学校で先生が「みんなのことがすきだからおこれる」と言っていたことを思いだしました。だから、母も同じ気持ちでおこっているのかなと考えました。もし、道ですれちがった人が悪いことをしていても、おこれないけど、毎日いっしょに生活している人なら、おこれると思ったのです。だから母は毎日いっしょに生活していて、私のことを大切に思ってくれてるから、私のことをおこれるのだと思いました。

私の父は仕事の後、学童にむかえに来てくれます。帰り道で私の荷物を持ってくれます。あと、母がいないとき、家事をしてくれます。あと、父は工作をいっしょにしてくれます。そして、ならいごとにつれていってくれます。その帰り道にお菓子を買ってくれたりもします。私は父がいないと大へんだと思います。

私のおばあちゃんは、おいしい夕ごはんを作ってくれます。おばあちゃんがいないと、家族みんなが大へんだと思います。なぜなら、父と母は仕事が終わる時間がおそいから、おばあちゃんがいないと夕ごはんをつくる時間がないのです。たぶん、そうなると毎日コンビニのおにぎりやデリバリーになると思います。そうなると、いつも同じ

ものを食べることになるし、みんなのえがおがなくなると思います。だから、おばあちゃんのごはんでみんながえがおになっているのだと思います。

私の家族は、一人一人のやくわりがあると思います。姉は私といっしょに遊んでくれます。母は休日にいっしょに買い物をしたり、お菓子をいっしょに作ったりしてくれます。父はいつも学童のむかえにきてくれます。おばあちゃんはおいしい夕ごはんをつくってくれます。だから、私は家族がいて、しあわせだと思います。

そして、私のやくわりは、なにかなと考えてみました。自分ではわからないので、家族に聞いてみました。母は私がいないと、しゃべる人がいなくて、さびしいといいました。姉に聞くと、「ホームナース」と言われました。なぜなら、私がいつもばんそうこうなどをバッグに入れて、持ち歩いているからだと言われました。私のやくわりは、まだあまりないけれど、私は家族がいてくれてよかったなと思いました。

僕にとっての家族

北秋津小学校五年　新田　逢人

なぜ、僕がこのテーマにしようと思ったかというと、僕は父の仕事で三年間メキシコにいたことがあります。メキシコにいた時は思わなかったけれど、今ではすごく感しゃしていることを書きたかったからです。

まず一つ目に僕が感しゃしていることは、学校に送迎をしてくれたことです。僕はメキシコにいる時、メキシコの学校とメキシコにある日本の学校に通っていました。日本とはことなり大人でも人が少ないところを歩くのはとても危険でした。まだ、その時五さいの僕はお母さんやお父さんが、車で連れていってくれました。午前中にメキシコの学校があり、午後にもう一つの学校があるので、私とお兄さんと両親みんな、日々の生活がいそがしそうな暮らしの中、毎日、どんな時も送迎をしてくれた両親には心から感しゃの気持ちでいっぱいです。また、どこへ行くにも手を必ずつないでくれた兄にも感しゃしています。

二つ目に僕が感しゃしていることは、学校での昼ご飯です。メキシコの学校は、昼食を自分で持ってくるので、母が朝早く起きて毎日かかさず作ってくれました。材料が限られていたメキシコのスーパーで、お母さんは健康やメニューを考えて商品を選ぶのがとてもむずかしかったそうです。その中で、素材を選び元気が出るように作ってくれたお母さん。毎日ご飯を食べるのがとても嬉しかったです。

三つ目は、友だち作りです。メキシコの学校は、メキシコやその他の国の人がたくさんいましたが、日本人は、ほんの少ししかいませんでした。言葉が分からず友だち作りがすごくむずかしかったのですが、お母さんや兄が、たくさんの人と話をして距離をちぢめてくれたおかげで、話しやすくなり、たくさんの友だちを作ることができました。日本の学校でも、お母さんや兄が話しやすくしてくれたので、居心地よく過ごすことができました。

四つ目は、旅行です。生活がとてもいそがしく、昼間はほとんど家にいませんでした。そのような生活の中での楽しみは旅行でした。「このためにがんばっている！」という程、楽しみでした。メキシコでは、数えきれない程の旅行をしました。どの旅行もすべて楽しく、明日からがんばれるような気持ちになれました。特に心に残ったのは、チワワ鉄道の旅です。七泊八日で行きました。メキシコには鉄道がとても少なかったため、電車が好きな僕たちへの父からのプレゼントでした。僕

たちはずっと大はしゃぎでした。すてきなプレゼントをしてくれた父には感しゃしています。

最後は、コロナ禍での家族です。メキシコに来てから二年後に、コロナが流行りました。学校には行けなくなり、オンラインで授業を受けました。外に行けなくなってしまったので楽しい思いをすることができませんでした。でも、家族で工夫し家でできる楽しいことをたくさんしました。コロナ禍での生活はとてもきびしかったので、家族との時間はとても楽しかったです。

このように、僕にとっての家族は、人生にかかせない大切な存在です。今でも、ずっとそばにいてくれる家族には感しゃしきれないほどの気持ちがあります。僕が大人になったら、僕の家族のようになりたいです。

自分の将来、地球の未来

北秋津小学校六年　馬場　実凛

私は最近、「将来のこと」について考えることが多くなりました。

将来自分はどんなところに住みたいか、どんな生き方をしたいか、など、様々な「将来」を考えていますが、中でも一番考えるようになったのは進路・職業です。

ちいさいときは「おおきくなったら〇〇になる！」と、興味の向くものに対して宣言していました。将来の夢を持つことは楽しいし目標がたてられてとてもいいものです。

けれど、去年五年になったときに、「将来って、そんなに簡単に決められるものじゃないんだ」と思いました。六年生になった私たちが子どもでいられるのは、あと六年間です。十八歳になったら必ずしも仕事につくわけではありませんが、私たちが大人になって仕事につくのはそんなにとおい話ではないと考えています。

そして、五年生の総合の学習で環境について学んだ時から地球の未来について考えるようになりました。地球温暖化のことや、環境汚染について詳しく調べていたはじめの頃は、「ずっと住んでいた地球がそんなにピンチだったなんて」という地球のピンチを知らなかったことに対するショックが大きかったです。けれど、だんだん「自分の住んでいる地球なんだ、自分たちの手できれいにしなくちゃ」という気持ちが強くなりました。そのときから、地球の未来、いいかえれば地球の将来を守れて、住みやすい環境を作れる大人になろうという気持ちを感じ始めていました。

今の地球は、プラスチックゴミ問題、食品ロス問題、そして地球温暖化問題などまだまだたくさんの問題があります。その中で、私にも心当たりがあるのが地球温暖化です。極端に暑い日や寒い日は冷房・暖房をつけます。その時によくやってしまうのが、ドアを開けっ放しにしてしまうことです。さらに冷房・暖房の設定室温を上げすぎたり下げすぎたりしてしまうこともありました。地球の環境問題を知る前の私は、環境破壊につながる行動をたくさんしてしまいました。だからこそ今この地球に住んでいる私たちが、これからこの地球でくらす人のためにできることをする大人になりたいと思いました。

そのためには、それぞれが自分の将来を考える上で、地球の未来を大切にする必要があります。また、大人になったら、自分にできることを見つけて行動に移す力が必要です。いい環境づくりをすることと、大人になって仕事につくために必要

とされる力は同じはずです。私は将来、自分がどんな大人になるのかわからないけれど、地球のためにできることを自分から見つけて行動できる大人を目指していきます。また、地球の未来を守るためには今の私にもできることがあります。また、六年は学校の代表でもあります。なので家だけでなく、学校でも下級生たちのお手本となりつつ環境を守る学年として頑張ります。

これから私たちは、それぞれの夢に向かって生きていき、将来の目標をたてます。その上で、自分や地球だけでなくいろんな人やものの「将来」を考えられる大人になっていければいいと思いました。そうすれば、未来の人々も安心して将来の夢を持って生活できるのではないでしょうか。

将来の夢

東所沢小学校六年　髙山　杏珠

私の将来の夢は、パティシエです。パティシエになりたいと思った理由は、クッキーやケーキを初めて作ってみたときに、作るのが楽しくてまた作ってみたいなと思ったからです。

パティシエになるためには、調理師専門学校や製菓専門学校に通い、卒業してからレストランや菓子店、ホテルに就職するコースが一般的です。なので、パティシエになるにはたくさん勉強しなければいけません。私は、これから少しずつ勉強をしていきたいと思っています。

私の夢は、世界中の人々に美味しいお菓子を提供することです。自分の作ったお菓子がたくさんの人に美味しいと言ってもらえて、たくさんの人を笑顔にすることが私の最大の喜びです。お菓子には、人々を笑顔にする力があると思っています。私は、自分の作ったお菓子で人々を幸せにすることができれば嬉しいです。

私が将来パティシエになる理由は、人々を幸せにできる仕事だからです。お菓子は、人々の心を癒し、笑顔をあたえてくれます。私は、自分が作るお菓子で多くの人々の日常を少しでも豊かにしたいと思っています。また、お菓子作りは創造性に溢れ、自分のアイデアを形にすることができる仕事です。試行錯誤しながら必ず完成するという達成感があります。私は、将来自分の店を持ち、多くの人々に美味しいお菓子を提供したいと思っています。

パティシエの仕事には、魅力があります。一つ目は、経験・知識が身につくことです。お菓子作りには、素材の選び方や調理法、そしてデザインなど様々な技術が必要です。パティシエになるためには、それらを学ぶ機会があります。二つ目は、創造性に溢れる仕事です。お菓子作りは、自分のアイデアを形にすることができる創造的な仕事です。素材選びやデザイン、調理法など、自分のアイデア次第で様々なお菓子を作り出すことができます。三つ目は、多くの人々を幸せにすることができるです。お菓子は人々の心を癒し、笑顔をあたえてくれます。パティシエは、自分が作ったお菓子で多くの人々を幸せにすることができます。そのため、仕事にやりがいを感じることがあります。

パティシエになるためには、努力が必要です。一つ目は、基本的な技術の習得です。まずは、基本の技術を身につけることが大切です。二つ目は、知識の勉強です。材料や調理法に関する知識が必要です。三つ目は、味のセンスです。美味しいお

菓子を作るためには味のセンスを磨くことが必要です。

将来、パティシエになるためにもっともっと努力していきたいと思います。勉強をたくさんして、将来、パティシエになれるようにがんばりたいと思います。たくさんの人に喜んでもらえるように、味や見た目や食材に特にこだわりたいと思います。

ぼくとラグビー

東所沢小学校六年　山根　大樹

ぼくは、年中の時からラグビーをやっています。自分は体も大きいし足も速くなったので、試合で活躍することができて楽しいです。また、練習では高学年で二チームに分かれ練習試合を行っています。そして、八月十八日から合宿に行き、自分たちの課題をみつけてきました。それは、仲間を信らいすること、そして、信らいしてもらうことです。

ぼくは、自分のポジションの役割を一生懸命努力している仲間のことを見ることで、「この人ならやってくれる」と信らいすることができます。これと同じように、ぼくも一生懸命やることで仲間に信らいされると思います。具体的には、オーバーにいったりすることです。オーバーとは、タックルをされて倒された仲間を相手にボールを取らせないために相手をおしのけるプレーのことをいいます。また、オーバーの他にタックルがあります。タックルで信らいを得るには、攻めてきた相手を必ず止めることで、「よし、この人にタックルさせたら絶対にとめてくれる。」と信らいしてくれます。ぼくは、このオーバーとタックルの二つをできるようにしたいです。ですが、その人たちにも個性があります。そして、その一人一人が個性を理解し、責任を全うすることは、「ワンフォーオール・オールフォーワン」です。この言葉には他にも、トライに至るまでに自分を犠牲にしてでも活躍した選手たちをたたえる言葉でもあります。

次に、「ノーサイドの精神」です。この言葉は、試合が終われば敵も味方も関係なく、お互いの健闘を称え合い、感謝し、ラグビーを楽しんだ仲間として友情を深めるという意味があります。

最後に、自分の夢についてです。ぼくは、ラグビーが好きで、中学・高校でも続けていたいので、今は中学受験で合格するため、勉強をがんばっています。ですが、四六時中勉強なので、みんなが外で遊んでいる中勉強するのはつらく、さみしいのですが、そんな時ラグビー日本代表の姫野和樹の言っていた「強い心を持つ」というのが支えになり、目標のため、明日の自分のために自分に自信を持ってがんばっていきたいです。

中学生　特選

空の色

南陵中学校一年　釼持　珀衣

私は今、エアコンの効いた部屋で宿題をしている。窓の外を見てみると、入道雲のういている青い空が広がっている。とても涼しくきれいな景色の見える部屋。だが、外に出てみるとそこは全く別世界。気温は三十五度を超える暑さで、聞こえてくるのは工事の騒音ばかり。

同じ思いは、家族旅行で行った北海道でもあった。避暑地といわれていることもあって涼しいのを期待していた私はあまりの暑さに驚いた。川の水は温かく、気温は三十度を超えているような状態だったのである。また、伯母の家に遊びに訪ねた時は、あまりの暑さに面食らってしまった。北海道のほとんどの家では、夏でも三十度を超えることが少ないためにエアコンが無いのだという。例年ならばエアコンが無くても生活できていた北海道に、一体何があったのか。

そんな中、父からある話を聞いた。父が子どものころは、猛暑日という言葉自体無かったらしい。父の時代では、天気予報の中でよく聞く言葉は夏日。真夏日でさえ、あまり聞くことのない言葉だったそうだ。しかし現代では、真夏日や猛暑日が当たり前で逆に夏日などという言葉はほとんど耳に入ってこない。この話は、たった数十年で気候が大きく変化していることが、よく分かる話だった。

このような気候の変化は、世界の様々な場所で大きな災害をもたらしている。今まさにニュースで報道されている、ハワイのマウイ島の山火事がいい例だ。今までマウイ島では山火事など一度も起きたことが無かった。なのに今回このような出来事が、なぜ起こってしまったのか。それは、ハリケーンと干ばつの影響によるもののようだ。元々この季節は乾季だったが、今年は特に干ばつがひどかったそうだ。そこに勢力の強いハリケーンによって枯れ葉などが擦れ合い火事が起きてしまったのである。だが、これらの自然現象と気候変動の関連性は、まだはっきりと解明されていない。ただ、ハワイ大学の火災生態学者はいう。この何十年かで自然のサイクルが、狂いだしているのは確実だと。

また、このような気候変動による災害は日本でも起きている。例えば、沖縄や九州に大きな打撃を与えた台風六号。日本では、一年を通しての台風の発生数は二十五前後で、日本での一年間の台風発生は特に変化がなかった。しかしそのかわりに台風の勢力が強まる傾向にあった。そして、勢力が強まっていくのと比例するように、台風の被害も拡大している。沖縄では停電が起こり、夜も明かりを点けられず、暑い中エアコンを使うこともできない。さらには、食料を手に入れるのも難しいような状態だ。また、観光地として有名な沖縄にとって、夏休みの台風直撃は経済的にも大きな影響を与えたはずである。

ハワイや日本だけではない。今も様々な場所で、気候変動による影響で起きた災害は人々を蝕んでいる。しかし、その原因が人類にあることも忘れてはいけない。そして私たちは、私たちができることを探すところから、始めるべきではないだろうか。

自分が大人になったとき、この部屋から見た空が同じアオ色であることを願わずにはいられない。

百人のぼくが力を合わせたら

南陵中学校二年　樋口　紋

今、ぼくには、やりがいを感じていることが二つあります。一つは、狭山丘陵の森林保全ボランティア。もう一つは、地元の寿々木流囃子連です。どちらも自分にとってとても大切なもので、楽しんで参加しています。

森林保全ボランティアを始めたキッカケは幼いころに感じた強い思いからでした。ぼくは、ずっと「おらは動物に生まれたかった」と思っていました。なぜなら、人間は無駄なことばかりして自然を破壊するから。自然界の動物も植物も人間の思い通りに動かされて申し訳ない気持ちでいっぱいでした。でも、ある時気づいたのです。人間であるからこそ自然や生き物を守ることができることに。人間がやっている過ちを正すことができるのは人間しかいないと。動物は賢く生きているのに人間に反対することができないのだから。それに気づいた時、幼いぼくの夢は「森を守る仕事をすること」になったのでした。そのころのぼくにとって「森＝世界中の自然」を意味していました。

その夢に向かうために、自然保護に関することを調べ始めました。ですが、小さな子どもができる自然保護活動は少ない上に、ちょこっとした体験だけでした。そこで自分で行動してみることにしたのです。森を守るにはまず森や自然と仲良くふれ合うことが大事。なにより、思うだけでなく実行すること。森や自然のある場所へ行ってみる、そうすれば森や自然の方から夢に向かうヒントをくれます。

まずは、いつも遊び場にしていた八国山を遊ぶ時と違う目で観察してみることにしました。木の根がむき出しになって、いつも何となく気になっていた木があったので、じっくり観察しました。この木は大丈夫なのか？そう思って管理事務所のレンジャーさんに電話をしてみたら、木は一応大丈夫だと教えてくれました。根に土をかぶせられないか聞くと、世界で外来種と在来種があるように、一つの山の中でも場所によって生態系が違うので、ほかのところから土を運ぶことは国内外来種を持ち込むおそれがあるのでできないと説明してくれました。自然は考えていたよりずっとデリケートなのだと知り、気をつけないといけないと思いました。でもレンジャーさんは喜んでくれて、仲良くなったから伝えてよかったとうれしく思いました。そんなことがあって知識も少し増え興味がもっと湧いてきたけれど、まだ小学生だったから森を守るといっても自分にできることが何なのか見当もつきませんでした。そこでレンジャーさんに聞いてみると、こどもレンジャーになるヒントを教えてくれました。「八国山を遊び場にしているのなら外来種のムネアカハラビロカマキリの調査をしてもらえるかな？」任務を与えられたぼくはうれしくて、八国山で一生懸命カマキリを探しました。幸いなことに見つけたカマキリはみんな在来種でした。

あれから三年経った今、中学二年生のぼくは狭山丘陵友の会で森林保全ボランティアに参加しています。小学生のときは安全上の理由で参加させてもらえなかったので、中学校に入学した去年四月にまっ先に入会しました。ちょうどコロナの間中止していたボランティア活動が再開されたところでした。初めて参加した日、レンジャーさんたちとボランティアを長くやっている先輩たちがとても温かく歓迎してくれてうれしかったです。一番年上の人は八十三歳のＡさん、草木にも昆虫にも詳しく、作業するときの道具の安全な使い方も丁寧に教えてくれます。そう、活動中は安全が第一、チームワークが大事なのです。メンバーはベテランの人が多く、下草刈りや茂りすぎた木の伐採などを黙々と進める間に、ぼくに色んな知恵を与えてくれます。森の中で生き物たちとふれ合いながら、ちょっと動物に近くなった気持

ちで落ち着きます。

もう一つ大事にしている寿々木流囃子連の方は八国山の中にある八坂神社のお祭に欠かせない役割で、夏祭には神楽殿でお囃子に合わせて狐や獅子が舞い踊ります。いとこたちがやっていたので、ぼくも自然と仲間入りして月に二回太鼓や舞いの練習をしています。お囃子の音色は昔からの自然とのつながりを感じさせてくれて心地よいです。今度は狐の舞いを習えることになってうれしいです。

大切なことを二つ語りましたが、どちらにも大きな問題があるのです。人が集まらないということです。いつも思うのはぼくが何十人もいればいいのに。小学校のクラブ、中学高校の部活で地域の自然とお囃子などの伝統文化を守る活動を熱心にやるべきだと考えています。

友情とＳＤＧｓ

北野中学校二年　桑原　叶多

今年の夏休み、久しぶりに台湾から友人が遊びに来てくれました。コロナの影響で彼が日本に遊びに来てくれるのは久しぶりで、お互いに会うのを楽しみにしていました。

僕は幼稚園から小学校の高学年になる時まで台湾で過ごしました。この夏遊びに来てくれた友だちは、現地の小学校の時の大の仲良しで、中国語を完璧に話すことができない僕を助けてくれたり、日本のアニメやゲームのことを話したりしていつも一緒に過ごしていました。

所沢駅の改札で待っている時、四年ぶりの再会で彼のことすぐに分かるかな、僕のことも気づいてくれるかな、と不安でした。しかしそんな不安は遠くからお互いに気づいて手をふった瞬間に吹き飛びました。

あるお店に入ったとき、

「あっ。」

と彼が急に店の奥に向かっていったので、後を付いて行ってみるとそこには給水機がありました。

「日本で初めて見た。」

と言って、彼はマイボトルをさっと出して水を入れていました。台湾では給水機が様々な場所にあります。駅や空港などの公共の場所では必ずあり、僕もお茶の葉を入れたマイボトルに水やお湯を入れて飲んでいました。美味しそうに水を飲む彼を見ながら僕は少し恥ずかしい気持ちになりました。台湾から帰国してからの自分を振り返ってみると、僕はマイボトルを持ち歩いてはいましたが、その中の飲み物が無くなったときにはペットボトルの飲み物を買って詰め替えていました。そしてマイボトルを持っている日本人のほとんどの人が自分と同じではないかと思いました。そのとき僕はＳＤＧｓのことを思い出しました。世界は今、人類がこの地球で暮らし続けて行くために、二〇三〇年までに達成すべき目標を定めてこれを達成するために動いています。二〇三〇年と言えば僕が二十歳になる歳です。僕らが大人になり社会の中で活躍しようとしていく歳までに達成できるように世界が動いているのです。

その後、僕たちは会えなかった四年間のことをお互いに話しました。友だちのこと、住んでいた周りのこと、そして大好きだった台湾の食べ物のこと。台湾には日本でもブームになったタピオカミルクティーがあります。ミルクティーを飲む時にタピオカがストローの中を吸い上がってくるのを見ながら飲むのが僕の飲み方で、台湾の思い

出の味の一つです。しかし、その大きめのプラスチックストローは、僕が日本に帰国した後、法律で禁止になったそうです。少し残念に思いましたが、台湾の代表的な飲み物であるタピオカミルクティーのストローにもＳＤＧｓへの取り組みが行われていることを知りました。

友だちと別れた後の帰り道、台湾の生活の中に溶けこんでいるＳＤＧｓへの取り組みや友だちが言っていたことを思い出しました。台湾ではレストランで余ったものを持ち帰る「打包」という習慣や、誰でも簡単に使うことができるＹｏｕＢｉｋｅというレンタル自転車が街のたくさんの場所に備え付けられています。また公園には遊具もありましたが、ストレッチをしたり、お年寄りも安全に体を動かせる健康器具が多く設置されていました。ＳＤＧｓに対しての取り組みが進んでいたんだなと思いました。しかし、友だちが今回

「日本はゴミ箱はないけど、どこでもきれいだよね。」

と言っていたのを思い出しました。台湾のＳＤＧｓへの取り組みに対して良い所が色々と浮かんできましたが、日本の取り組みも世界では二十一位にランクされていて良い所もたくさんあり、結局どんなにいい制度や習慣があっても、一人一人の意識が一番大切なのではないかと気がつきました。二〇三〇年に向けて一人一人の意識を高めることが大きな力や動きになっていくと僕は思います。

友だちとの再会は、とても懐かしく、そして楽しい夏の思い出になりました。そして僕たちの未来に向けて何かを変えて行く大きなきっかけになったように思います。きっと友だちも何かを日本で感じて台湾に帰っていったと思います。これからも友だちとの友情を大切にして、僕たちの素晴らしい未来を作っていきたいと思います。

最後に、あとで調べてみたら所沢のお店で見つけた給水所は所沢市との協力で設置されたもので、市内のたくさんの場所にあるそうです。所沢市のＳＤＧｓへの取り組みを市民として誇らしく思うとともに、台湾での生活を生かして自分が日本でできることをもっと考えてみようと思いました。素晴らしい未来のために。

中学生　金賞

私たちが住んでいる埼玉県の長い歴史

南陵中学校一年　寺内　美智

私は埼玉県のことについてあまり知らないので、埼玉県の歴史や、ミニシンボルマークについて調べてみることにしました。

まず始めに「埼玉」という名前の由来について調べました。埼玉は「前玉神社」(サキタマ)に由来しています。前玉神社は約千五百年前にはすでに誕生していました。神社に祀られているのは「前玉比売神」サキタマヒメノミコトと「前玉彦命」サキタマヒコノミコトの二柱となっており、この「前玉」の由来を「幸魂」さきみたまとしている説があります。そして西暦七百年代には前玉神社に便乗し、神社のあるこの地域一帯が「前玉郡(さきたまのこおり)」と呼ばれるようになりました。また、前玉郡の地を詠んだとされる歌が奈良時代の「万葉集」にあります。「小埼沼」を詠った一首の出だし「佐吉多万能(さきたま)」の名で見られました。そして平安時代の「和名類聚抄」で「佐伊太末(さいたま)の郡名が見られることから「さきたま」が転じて「さいたま」になったことが分かりました。埼玉の由来の幸魂の意味は、良き魂良き心、明るく正しき想いという意味があります。私は「相手を想いやり、清く正しい心をもつ。」そんな埼玉県にしたいなと思いました。

次に埼玉県民の日のことについて調べました。まず県民の日とは郷土について理解と関心を深めて自治の意識を高め、私たちのより豊かな生活と県の躍進を願う日のことをいいます。埼玉県民の日は十一月十四日です。その理由は明治四年に廃藩置県が行われ、十一月十四日に「埼玉県」と「入間県」が誕生しました。明治六年「入間県」は「群馬県」と合併して「熊谷県」になりました。明治九年埼玉県と旧入間県が合併して、ほぼ今の埼玉県の形になりました。昭和四十六年、それからちょうど埼玉県が誕生して百年目になり、十一月十四日を「県民の日」としました。この年に県立博物館やさいたま水上公園がつくられたり、県内では、毎年この日を中心に色々なイベントが開催されたりします。昭和四十六年は一九七一年で今年は二〇二三年なので今年の県民の日で百五十二周年になることがわかりました。

最後に埼玉県のシンボルについてです。埼玉県の県章はまが玉十六個を円形に並べたものです。埼玉県名由来の一つとされる「幸魂(さきみたま)」の「魂」には「玉」の意味もあり、まが玉は埼玉県とゆかりの深いものとなっています。まが玉を円形に並べ、「太陽」「発展」「情熱」「力強さ」を表しています。「太陽みたいな情熱とそして発展し、力強くなっていく。」ということを表しているのかなと私は思いました。次に「彩の国」について、「彩」は、色どりや美しさなどという意味をもつ言葉です。自然、産業、文化、学術などの様々な分野で発展する多彩な国、埼玉県を表現しています。このマークはブルー、レッド、グリーン色の三人が手を取り、肩を組み合い、楽しく元気に前へ進もうとしているイメージを表現しています。そして色がブルー、レッド、グリーンなのも意味があり、「夢がいっぱい」はブルーで「元気がいっぱい」はレッド、「自然がいっぱい」はグリーンだということが分かりました。

私は埼玉県のことについて調べてみて、名前やマークの意味や由来を理解することができ、改めて埼玉県の良さを感じることができました。

将来の夢

富岡中学校一年　森田　陽日

ぼくの将来の夢は、農家です。きっかけは、ぼくが農家に生まれたことが第一です。小さい頃から手伝いをしてきて、家族の様子を見ていました。それで、自分のおばあちゃんが七十歳でとても体がじょうぶで、健康的なので自分も健康的な生活をおくりたいから家の農家をつぎたいなと思いました。農家の良いところは、野菜を自分で育てることで、いつでも新鮮な野菜を食べることができることと、育てる野菜によって四季を感じられることです。あと、都会やデスクワークでは感じることのできない自然の風、新鮮な空気を味わうことができ、とても気持ちの良いことだからです。もう一つは、他の仕事のように指導されず自由にマイペースで仕事ができるのが良いです。また、仕事を一人でやるのではなく、ボランティアの人が手伝ってくれたり、同じ農家の人たちと情報交流したりして、助け合います。また、この交流でコミュニケーション力を上げて、信頼度が上がるなどのメリットがあります。

次に、農家になるために何をするかを考えました。まず、農家になったらいっぱい体を動かすので、そのために毎日一定の運動をし、健康的な食事などを食べ体の調子を整え体力をつけると良いと思いました。

二つ目は、自分は植物についてあまり知らないので、植物のことを良く調べ育てる時期、育て方を調べ特に土についてのことを理解した方が良いと思いました。植物については、手伝いでも理解が深まると思いました。あと一つは、計画的能力が必要だと思いました。自分は、夏休みの宿題などを早めにやるのではなく、夏休み後半に急いでやることが多いので、計画的能力をつねに頭に入れて能力アップできると良いです。農業では、動物や虫に植物をやられることを想定し、対策を練らなければなりません。この計画的能力が農業では、かなり必要となります。

次に、自分にはこくふくをしなければならないものがあります。まず、一つ目は虫です。農業は、自然が多いので生き物がたくさんいます。もし、通ろうとしたところに虫がいたらうまくにがさないとならないので、つかんでどかすという行動が必要になります。虫が苦手だとその行動ができません。なので、こくふくしたいです。次は、貧血をこくふくすることです。自分は、普通の人より貧血になりやすく、立ちくらみを起こします。なので、鉄分を多く含んだ食べ物を食べたり、日に浴びることをしてこくふくをします。

将来の夢を改めて考えてみてそれまでにつける能力や、こくふくすることなどがたくさんあり、とても大変そうだけどやりがいがありそうです。まず初めに計画的能力をつけようと思います。他のことは、一つ一つ努力して身につけ、立派な農家になりたいと思います。

「当たり前」という幸せ

所沢中学校二年　齋藤　彩乃

皆さんにとっての当たり前とは、どんなことですか。私は、衣食住ができることだと思います。何気なく毎日安全に不自由なく過ごせている今の生活は、当たり前なのでしょうか。ウクライナ戦争が始まってはや一年半、私は「当たり前」ということについて考えるようになりました。歴史の授業で戦争について学んだことがありましたが、まさか今の時代に戦争が起こるなど思ってもいませんでした。毎日、たくさんの命が奪われるニュースや沢山の我慢をしている同世代の子たちをみて「今の生活って当たり前ではない」と思うことが増えるようになりました。

幼い時に戦争を経験している祖父から聞いた話があります。母方の祖父の父は戦争に行き生きて帰ってこられたそうです。しかし、戦争に行っ

ていたから当然学校など行くことができていません。そのため文字を書くことができなかったそうです。だから私の母が幼い頃、祖父も一緒に平仮名の勉強をしていたと言っていました。この話を聞いた時に今まで理解ができなかった「勉強ができることって幸せなことなのだよ」という言葉の意味を理解できたような気がしました。思い返すと私は「勉強嫌だな、やりたくないな」とたびたび口にしていました。しかし、戦争を経験している人からすると贅沢すぎる悩みなのです。

祖父は八十歳近くになりますが今でもたくさんの知識を身につけようと勉強していたり私が分からない数学の勉強なども教えてくれたりします。また自営業を営んでおり、まだまだ働き続けています。このように、高齢になった今でも学び続け頑張り続ける祖父にはいつも刺激をもらいます。ふと祖父に

「将来の夢って何だったの。」

と聞いたことがあります。私は八十歳の今でも続けている商売をすることが夢だったのではないかと予想していました。しかし

「数学学者になることだったよ。」

と聞かされました。祖父は数学が大好きで学者になることが夢だったそうですが、長男ということもありお店を継ぐことが宿命だと思っていたそうです。一九七〇年代は就職困難といわれていた時代であったそうです。そのため、自営業というものが「セーフティネット」とされていたといいます。しかし祖父のような夢がある人にとって自営業というものが夢を諦めざるをえないものとなっていたと考えることもできると思いました。この時代は、やはり家制度の風習が強く残っており生まれた順番によって様々なことが制限されることもあったと思います。私は兄と姉の三兄弟ですが、祖父は長男をはじめ私たちに次のような言葉をよくかけてくれます。

「自分がやりたいことをやりなさい。自分で決めることができるのだから。」

そのため、私たちに一切「お店を継いでほしい」と頼んできたことはありません。夢を諦める辛さを知っている祖父はいつも、私たちがしたいことを一番に考えてくれます。日常の中に「自己決定」というのは、たくさんあふれているように感じます。たしかに責任は重大かもしれませんが、それと同時にとても「幸せなこと」であると思うようになりました。

私が今、当たり前に生活できていることや勉強などで悩んでいることは決して「当たり前」ではないと思いました。世界中には衣食住もままならない人がたくさんいます。また祖父の話を聞いて悩めることも幸せなことだと感じました。そのため、普段当たり前と何気なく過ごしている毎日にもっと感謝して過ごしていこうと思うことができました。

あいさつからより良い社会へ

中央中学校三年　加納　ハナ

私は一歳の時に今の家に引越して来て以来、毎回欠かさずあいさつをしている人がいる。それは、私の家と駅の間にあるスポーツセンターの駐車場にいる警備員さんである。私は、一人でいる時だけでなく、家族や友だちといる時でも、率先してあいさつをしている。以前は何も考えずに行っていたが、中学生になり「いつも守ってくれてありがとう。」という気持ちを込めて行うようになった。今の私は、相手の目を見て笑顔であいさつをすることを心掛けている。

普段はあまり人通りが多くない駐車場の道だが、お祭りがあり、いつもと比べて人通りが多い日があった。私はいつも通りあいさつをしたが、驚いたことがあった。なんと、その道に十人ほどいる中で警備員さんにあいさつをしたのは私だけだったのだ。私は、なぜあいさつをしないのか、とても疑問に思った。駅に着き、電車に揺られな

がら思考を凝らしても、あいさつをしない理由は何一つ浮かばなかった。終始もやもやしていると、以前父が私と歩いている時に、一人の時はあまり挨拶をしていないと言っていたことを思い出した。家に帰って父に、なぜあまりあいさつをしないのかと聞くと、納得する答えが返ってきた。

「周りがみんなしていないから、あいさつをしたくても恥ずかしくてできない。」

私自身、良いことだと分かっていながらも、周りがみんなしていないことをするのはどこか恥ずかしくて、できない経験が今まで何度もある。ならば、みんながあいさつをすることで、この問題を解決できるのではないだろうか。あいさつは素晴らしいもので、私は、急いでいる時でも悲しい時でも挨拶をすることで心が落ちつき、明るい気持ちになる。あいさつによって自分自身にも良い影響を及ぼすのだ。

そこで私は、一人でも多くの人に、あいさつが及ぼす良い影響を感じてほしいと思い、どうすればみんなが恥ずかしがらずに挨拶ができるかを考えてみた。

一つ目は、教育だ。小中学校などであいさつの重要性やあいさつがもたらす効果を学ぶことで、率先してあいさつを行う人が増えるだろう。また、子どもの時からあいさつを沢山交わすことで、あいさつが習慣になることが期待される。

二つ目は、環境づくりだ。地域や国があいさつ月間などのキャンペーンを設け、あいさつのしやすい環境をつくる。これを行うことによってみんながあいさつをするようになると普段あいさつをしない人でも気軽にあいさつができると考えられる。この二つを実行すれば、あいさつが今よりも多く交わされることにちがいない。

また私は、あいさつを行うことでより良い社会を築くことができると考えている。あいさつによって自分も相手も良い気持ちになるだけでなく、コミュニケーションの活性化や犯罪防止にも大きな効果をもたらすことが明らかになっている。私は、毎回警備員さんにあいさつをしていることで、何人もの警備員さんと顔見知りになり、今では私があいさつをすると、

「いってらっしゃい。」

「おかえり。」

などと返してくれるまでとなった。お互いの名前などは知らなくても、あいさつから良いコミュニケーションが行われるようになったのである。また、顔見知りであるため、困ったときや危険にさらされたときでも頼りやすい。そして、あいさつなどによって地域の繋がりが深まると、犯罪も減るのである。

このように、あいさつをすることによって明るい気持ちになったり、コミュニケーションの活性化や犯罪防止に繋がったりと、人々や社会に良い影響を及ぼすのである。私は、この作文で私が挙げた、みんながあいさつをするための方法などを基に、あいさつが飛び交う社会になることを願っている。

「魔法の言葉」で未来をはじめる

南陵中学校三年　山下　桃子

「言葉には魔法がある」ということを聞いたことがありますか。その名の通り、発した言葉にはまるで魔法のような不思議な力がある、ということです。つまり、発言が現実になったり、頑張ろうと一歩踏み出す勇気をくれたりするのです。私は今まで、悲しみを抱えているときや自分自身を情けなく思ったときに、ネガティブな言葉を発してしまうことがありました。しかし、ある二つの言葉を人から聞いて、明るく、ポジティブな言葉を使うことで、道は開けていくと思えるようになりました。

その言葉の一つ目は、「できないことを数えるのではなく、一つできるようになったことを数えよ」というものです。これを聞いたとき、まるで心に言葉が染み込んでいくように感じました。そのときの私は、テストが思い通りにいかなかったり、がっかりした出来事があったりして、とても落ち込んでいました。でも、誰しもできることはきっとあるのだとその言葉が私に気付かせてくれました。自分はダメだ、と思うだけではなく、前を向くことが大切だと知るきっかけになりました。今も自己肯定感を高めて、やる気に満ちた自分になりたいときによく思い出しています。

また、二つ目の言葉は、「問いに対して、立ち向かおうとする気持ちを持て」です。これは、勉強中、難しい問題に頭を悩ませてしまう私にぴったりの言葉だと思いました。学ぶときは、その問題を越えていくくらいの、少しの強さを持つのがよいこと、迷いがあったり、心配事があったりしても、どんと来いという気持ちを持ち続けること、それらを教えてくれたのはこの言葉だと実感しました。

この二つの言葉は、どれも口に出してみると、やる気や勇気をもらえたり、頑張ろうと活力を得られたりします。心に響いたこれらこそが、私にとっての魔法の言葉なのです。これから、私たち中学三年生は人生の一つの岐路ともいえる高校受験を迎えます。初めて経験することですから、複雑な気持ちになったり、迷ったりすることは少なくないと思います。でもそんなときに、明るく前向きな魔法の言葉を口にして、この先の未来を想像したいと考えました。きっとチャレンジ意欲がわいて、何事にも熱心に取り組めるでしょう。

さらに、目標に向けて努力するときや、団結して良い結果を目指すとき、一緒に活動する人にこの言葉を紹介したいと感じました。少しの声掛けが、大きな結果を生み出します。以前の私のように、ネガティブな考え方に陥る人も多いと思います。そんなとき、誰かが掛けてくれた一言がその人を救う原動力になったらとても嬉しいです。実は私も、この二つの言葉は普段お世話になっている方からいただいたものでした。言葉を聞いて、心がフッと軽くなったのは忘れません。だから私も、自分の言葉で誰かを励ますことができるようになりたいと深く思っています。今回改めて、言葉についてよく考えました。自分が掛けてもらった魔法の言葉の力を信じて、一歩ずつ未来に向かって進んでいきたいと思います。高い壁も、魔法の言葉で、きっと越えられるはずだと信じています。

中学生　銀賞

伝える力

南陵中学校一年　朝来野　透和

僕は、サッカーをやっている。この夏休みに聴覚障がいのある小学生と一緒にサッカーをやる機会があった。

前日、コーチから手話で自己紹介ができるように、手話を練習してくるように言われた。インターネットで手話のやり方を調べて、自己紹介を考えた。

「こんにちは。僕の名前は、とわです。よろしくお願いします。」

この短い文章を手話で練習した。たったこれだけの言葉でも手話を覚えるのは時間がかかった。でも練習していて、僕がやった手話が相手に伝わったらとてもうれしい気持ちになるだろうなと思った。

僕のサッカーでのポジションは、ゴールキーパーだ。ゴールキーパーは試合中、フィールド全体を見ることができる。仲間に指示を出すコーチングはとても重要だ。試合中、大きな声を張り上げて仲間に指示を出す。でも時々それがうまく伝わらない時もある。伝わっていなければいくら大きな声を張り上げても意味がない。伝えたいという強い気持ちが必要だといつも心がけてプレーしている。

手の動きや表情で相手に気持ちを伝えたり、話ができる手話は耳が聞こえない人にとっては、とても大事なコミュニケーションの手段だけど、まだまだ僕たちには身近なものではない。もっと手話にふれたり、学ぶ機会が増えればいいのになあと思った。

そして、サッカー当日。まずは二人組になりお尻や足をタッチするゲームでウォーミングアップをした。大きなジェスチャーで相手に伝えることが大事だと思った。次に、六人組を作って、みんなで前からボールを送って競い合う練習をした。この説明が難しかった。伝わってほしいという気持ちで一生懸命に説明した。それが伝わった時とてもうれしかった。そして最後にチーム分けをして試合をした。小学生にたくさんボールに触ってもらって楽しんでほしかった。ナイスプレーをした時は、肩をポンと叩き、手で「good」のジェスチャーで一緒に喜んだ。いろいろなジェスチャーを使って、コミュニケーションがとれ、仲が深まった。自分も相手も良い気持ちでサッカーができて楽しかった。

やり方を工夫したり、相手のことを考えて自分の気持ちを伝える努力をすれば、サッカーだけでなく、いろいろなことを一緒に楽しめることが分かった。人を、障害があるないで区別することは間違っていると思うし、一人一人違うのは当たり前のことだと思った。お互いに思いやりの気持ちを持って、積極的に関わることができれば、友だちになれると、いろいろなことや気持ちを共有できると思った。気を使うのではなく、みんなと同じように接すること、助けが必要な時に少しだけ手を貸してあげることが大切なことだと感じた。

聴覚障がいのある小学生と一緒にサッカーをやった経験は短い時間だったけど、僕にはいろいろなことを感じることができた貴重な時間だった。

自然との共存

南陵中学校一年　大西　咲

私たちが今住んでいる所沢市は、近年、交通機関が充実し、土地価格が上昇してきています。最近は公共の場の工事が積極的に進められ、市全体が成長しているように感じています。

しかし、気になるのが開発が行われるのに対して自然が失われていることです。こうした問題は、所沢市だけでなくどの地域でも勃発してきている課題ですが、私はこの課題を真摯に受けとめ、改善策を考えて早急に改善すべきだと思います。また、環境を破壊してしまうのならば、開発を見直すことも重要だとも思っています。

私がなぜこのように考えるかというと、大きく分けて三つ理由があります。

一つ目は、自然を破壊してしまえば、何十年かはもう自然が戻らないからです。自然は今まで私たちにたくさんのことをしてくれました。そして、何より自然にも命があります。その『命』を、私たちが私たちの都合でうばってしまうのは、あってはならないと思います。

二つ目は、自然を有効活用できると考えているからです。例えば、森林を活用してアスレチックを作ったり、山頂に天望台を作ったりと、観光地へ開拓が可能だと思います。自然を残したまま、工夫して開発ができれば自然と共存ができるのではないでしょうか。

三つ目は、私に自然を残したいという想いがあるからです。私は、自然と小さな頃から触れ合ってきました。自然と触れ合うことは、家でゲームをするより解放的で魅力を感じたことを覚えています。しかし今、その自然は開発によって取り壊されてしまいました。これから所沢市に生まれる子どもたちが、身近に自然を感じられなくなると思うと、居ても立っても居られません。

とはいえ、開発が必要なのも事実です。川が氾濫したときのための貯水槽や、危ない山道を安全にするための新しい道など、安全な町をつくるには、多少の自然を壊して開発が必要不可欠です。そこで私は『自然を残す』という捉え方よりも『自然をいかす』という捉え方のほうが、自然と私たちが共存しやすいのではないかと考えました。

自然をいかしたまちづくりをしている他の市では、もともとある自然をうまいように開発して観光地にしていました。また、開発が難しそうな水辺の市も、水辺を利用して稲作をしたりして特産物を作り上げています。

このような具体例から、私は、自然をいかしたまちづくりには観光地や特産物が必要だと考えました。これには、

『観光客が来ればまちは潤い、特産物があればまちの宣伝にもなり、所沢市を知ってもらうきっかけにもなる』

というメリットが生まれます。もともとある自然をいかすので、特産物もつくりやすく大量に生産が可能だと思います。

所沢市は、駅周辺を中心に大きな建物が沢山建っています。大型のショッピングモールが数年後にはできあがり、注目を集められます。しかし、所沢市の特産物はあまり有名ではありません。うどんや団子、さといもにお茶なども、特産物というほど生産されていなく、所沢にはこれといった特産物は無いことに気がつきました。なので私は、様々な理由から特産物を有名にすることが大切だと思います。もちろん沢山の時間とお金もかかるでしょうが、ずっと自然を壊し続けてしまうよりは今、実行に移すほうが、未来につながるはずです。

私はまだ中学生で、一人ではなにもできません。しかし私には、守りたい自然があります。その自然を守るためには、様々な工夫もしなければならないことも学びました。

今までは、ただ自然を守ったほうがこの先のためになると思っていました。考えは変わりました

が自然を守りたい思いは変わりません。これからは、考えるだけでなく実際に自然を守る活動をしたいです。私は自然が大好きだから。

つながれ！エコ活動

南陵中学校一年　尾張　真桜

「このランドセルどうしようか？」

小学校を卒業して少し経った頃、母に聞かれました。もう使わないので、捨てるか記念に取っておくしかないと思っていましたが、

「これ再利用できるって知ってる？」

と言われて驚きました。六年間ずっと一緒に登校したランドセルを再利用できるなら、ただ取っておくよりもいいかもしれないと思い、使用済みランドセルの使いみちに興味を持ちました。

使用済みランドセルには、

一、ゴミとして処分する。

二、思い出としてそのまま取っておく。

三、リメイクする。

四、リユースする。

五、寄付をする。

などの使いみちがあるそうです。

ゴミとして処分することは、わたしにはできなそうです。思い出として残すにも大きいので場所を取ります。わたしは「リメイク」「リユース」「寄付」のうちのどれかを実際にやってみようと思い、調べてみることにしました。

リメイクは、今あるものを他の形に変えて再利用する方法です。ミニランドセル、さいふ、キーホルダー、椅子など、いろいろな小物にリメイクできることがわかりました。どれも元の色やデザイン、傷などを活かして作られるとのことで、普段使いができてコンパクトになるので、置き場所に困らず取っておけます。

リユースは、おさがりにしたり、フリーマーケットなどで処分することで、そのままの形で再利用する方法です。わたしのランドセルはカバーをつけて使用していたので、傷も少なくとてもきれいに見えます。ランドセルを必要とする人に再利用してもらうのもいいなと思いました。

寄付は国内外、主に海外の子どもに再利用してもらう方法です。ランドセルは日本独自の文化なので、どこにでも寄付できるわけではなく、ランドセル寄付を受け付けている企業やＮＰＯ法人などに直接持ち込むか送る方法があります。学校指定の物、宗教上の理由により豚革製の物、損傷が激しい物は受け付けてもらえないこともあるようなので確認が必要だそうです。

色々と調べていくうちに、わたしはランドセルを海外に寄付したいと考えるようになりました。貧しくて学用品を買うことができない発展途上国の子どもたちや、紛争で親を亡くした子どもたち、性別で差別され、勉強の機会をなくした女の子たちに、少しでも喜んでもらえたらいいなと思います。

使用済みランドセルは、捨ててしまえばただのゴミになりますが、様々な方法で再利用できることを知りました。小学校で学んだＳＤＧｓ(エスディージーズ)にもあるように、使えるものは再利用してゴミを増やさないようにすることで、わたしにもできる小さなエコ活動を意識して生活していきたいと思います。

ネットの普及で減少する人との関わり

北野中学校二年　酒井　隼

最近、世の中では人との関わりが減っているように感じます。近年の新型コロナウイルス感染症の拡大やインターネットの普及の影響もあり、人と直接話す機会が少なくなっているのではないでしょうか。

僕は、インターネットが人々に普及していくことがあまり良いことに感じられないです。表向き

には、気になったことがすぐに調べられたり、ＳＮＳを用いて人とのやり取りができるとても便利なインターネット。しかし、その便利さこそが僕たち人間にとって大切なものを失う原因となっているのではないでしょうか。

僕が前文に述べた大切なもの、その大切なものとは人との関わりです。現状、日本ではインターネットの普及が進み、二〇二一年時点で国民のインターネットの利用率は八十二・九パーセントとなっており、ほとんどの人がインターネットを利用しているということが分かります。つまり、これだけ多くの人が人との関わりを失ってしまっている可能性があるということです。

なぜインターネットが人との関わりを失わせてしまう原因になると考えられるかというと、ネット上でのやり取りに依存してしまい実際に顔を合わせて会話する、人と関わることへの不便さを感じてしまうのではないかと思うからです。スマホなどがあればネットで簡単にやり取りができますが、簡単か簡単ではないか、以上に大切なものが人と人との関わりにはあります。

人との関わりを今より増やすために人々が行うべきなのは、「人と人が様々な話を色々な人とすることができるイベント」だと僕は思います。沢山の人が集まって自分の好きなことを話せるような場を設け、その情報をインターネットを用いて発信すれば、インターネット上でのやり取りに依存してしまっている人の目にも届き、人と人との関わりの大切さにも気づいてもらえるのではないでしょうか。

僕がインターネット上でのやり取りに対して否定的な思いをもっていることには、ある理由があります。僕が小さい頃、祖父の家に行った時に祖父が僕に言った言葉。

「これからの時代、人と話したり人の顔を見たりする機会はどうしても減ってしまう。だけど、人との関わりは自分と関わる相手で喜びや悲しみを分かちあえたりするんだ。これは相手と直接関わることでしかできないこと。だから君は人との関わりを大切にするような人になりなさい。」

なぜ祖父は僕にこの言葉を伝えたのか、今となっては分からないが、この言葉は僕にとって、とても心に響いた言葉であり、この言葉がインターネットに対して否定的な思いをもっている理由です。

今の人々に必要なものはインターネットではなく人との関わりです。しかし、インターネットがあれば僕たちの生活がより便利なものになっていくことも事実です。これからの社会に生きていく僕たちはインターネットの便利な面だけではなく、その裏には人と人との関わる機会を失うリスクがかくれているということを知っておくことが大切です。

人と言葉

北野中学校二年　髙河　俊太

最近の社会は、ＳＮＳ等での誹謗中傷が後を絶たない。ネットでの心無い言葉によって精神を病み自ら命を絶ってしまう人がいる。これが今の社会の現状だ。このような世の中だからこそ僕は言葉の力について、生活していく中で重要だと思う二つのことを考えた。

一つめは、言葉の怖さについてだ。言葉には力がある。人を幸せにする力や、感謝を伝える力など様々だ。しかし、良い力ばかりではない。言葉は使い方によっては凶器になる。刃物など比にならないくらいに深く心に突き刺さり、心を壊す。これが言葉の怖さだ。この一つが誹謗中傷である。誹謗中傷には「悪口や根拠の無い嘘等をいって、相手を傷つける行為」という意味がある。何もしていないのに汚名をきせられ無実の罪で自分が傷つく。とても胸くそが悪くなる。これがネット上で起こるとさらにたちが悪くなる。ネットでの誹謗中傷は、コロナウイルスの影響で自粛生活を

余儀なくされスマホなどと触れる機会が増えたことで、不快に感じる情報との接触も増えた。このことからコロナウイルスが蔓延しだした二〇二〇年頃からネットでの誹謗中傷は増加傾向にある。ネットでは名前も顔も知らない誰かにまで悪口等を言われる。それだけで済めばまだ良いが、中には曲がった正義を振りかざし自分を正当化しようとする人がいる。そのような過激な人たちは誹謗中傷だけでなく、フェイク動画を作ったり、住所まで特定しようとする。ネットでは情報がまたたくまに拡散していくため事実を証明することは難しい。だから情報は鵜呑みにせずに自分でよく考えてから判断しなくてはいけないと思うとともに、自分でもスマホを持っている以上、気をつけなくてはいけないと思う。

二つ目は、心との繋がりについてだ。普段から言葉を使って話しているわけだが、先ほどもいったように言葉には力がある。そのため様々な受け取り方ができる。

例えば「とりあえず」という言葉は、「とりあえずこれやって」といったりして使うことがあるがこれは「投げやり」のように感じることもできる。上司と部下という立場であれば、「自分は見放されているのでは」と受け取ることもできてしまう。便利な言葉ほど誤解を招きやすいのだ。

人の心は誰でも繊細だと僕は思う。いくらメンタルが強い人だって必ずどこかに弱点がある。そこを突かれれば簡単に心は壊れてしまう。だから話をするときにはちゃんと「これを相手に言っても大丈夫か」としっかり考えてから発言しなくてはいけない。一歩間違えれば取り返しのつかないことになるかもしれないのだから。

言葉を扱うのはとても難しいことだ。他愛のない発言が誰かを救うかもしれない一方で誰かを傷つけているかもしれない。そして、その言葉一つで簡単に命も奪えてしまう。僕たちが毎日している会話はとても危険な行為なのかもしれない。でも、生きている以上会話をせずに生活することはできない。だから自分の発言や行動には責任を果たさなくてはいけないのだ。

これからの公園

北野中学校二年　水野　陽介

僕の家の近くには、小さい頃からしょっちゅう遊んでいる公園がある。ある日、この公園のあちこちにいきなり看板が立ち、最初、「何コレ？」と思って見てみると、「午後八時から午前八時までボール遊び禁止～近隣にご迷惑がかかります。」と書いてあった。僕が公園で遊ぶのは昼間だが、遊んでいて禁止という言葉が何度も目に入ると何だか気分が下がる。そして、あるお兄さんの顔が浮かんだ。その人は、僕がたまに夜公園を通るとほぼいつもいる人で、公園の真ん中のバスケットのゴールに向かって、一人で一生懸命練習をしていた。「あのお兄さんを見かけることももうないな。」と少し淋しくなった。そして、その半年位後には、壁にネットが張られた。サッカーボールを壁に当て、返ってきたボールをけり返す「壁当て」を小さい時からやってきたが、これも突然できなくなりかなりショックだった。少しずつ、公園でできないことが増えていくし、看板には、守らない場合はもっと強い対策をとると書いてあるし、僕は少しもやもやした。

少し前にテレビで、最近の公園事情みたいな特集をやっていて見たら、「スケボー禁止」の公園があった。小さい子どもの横をスケボーが通りすぎるなどマナーへの苦情があがって禁止にしたという。他の近所の人も、

「スケボーは回転する時にパタンと音がして、普段の生活にない音がすると気になる。」

と禁止に賛成だった。逆に、禁止と知らないでこの公園に来た小学生の親子は、

「運動公園という名前なので、スケボーが禁止だとは思わなかった。」

と残念がっていた。そして、市内の公園全てでスケボーが禁止だと知ると、
「スケボーができる公園が一個でもあれば良いのに。」
と、男の子が買ったばかりのスケボーを抱えて悲しそうに言っていた。
禁止事項は、スケボーだけでなく、今は全国の公園で増えていて、「キャッチボール禁止」「花火禁止」「合唱禁止」「ベンチの長時間利用禁止」など色々あって、多くは、近隣住民や利用者から意見や苦情があがり、役所や公園管理者が禁止を決めるそうだ。
僕は、このスケボー禁止の公園の話を聞いて、立場によって色々な考え方や感じ方があるんだなと思った。「今の公園は、誰かのやりたいが誰かの迷惑になる可能性がある」と番組で言っていたが、「たしかに。」と思った。ただ、僕がもやもやするのは、一部の人の意見によって、僕たちの知らないところで、いきなり禁止が決まってしまうところだ。もしかしたら、工夫したり、改善したら解決できることがあるかもと思うからだ。もう決まったことだから、ダメなものはダメではなく、どんな意見が出て、どこが問題なのかを知ったら、できるだけ禁止にしなくても済む方法を考えるのになと思う。僕は人が嫌がることはしたくないし、困らせようなんて思っていない。よくマンガに出てくる公園の横に住む雷オヤジみたいに、「ばっかもーん！」と大人から公園で怒られたこともない。だから、迷惑に思っている人がいるなんて知らずに遊んでいる。それが、ある日突然、迷惑をかけているから禁止だと言われると、昨日まではできていたのにと思うし、僕たち子どもは不安になるから、伸び伸び遊べなくなると思う。
公園の利用者は五十年前に比べ、今は五分の一に減ってしまったそうだ。公園でできることが減ると、公園に行きたいと思う人も減るというが、僕もそう思う。一度禁止になったら元に戻すのは多分難しいと思うので、禁止にするかどうかは慎重に決める必要があると思う。スケボー禁止の公園も、専用の場所を作ったらどうかという意見もあったので、色々な意見を聞いて決めてほしい。そうはいっても、公園の仕事の大部分は苦情対応だといっていたので、実際、色々な意見を聞くのは大変だということも分かった。
僕は、ある地域の取り組みでこれは良いなと思うのがあった。そこでは、公園を皆が自由に使えるように、禁止ゼロを目指して、住民が話し合いでルールを決めていた。お互いが言いたいことを言うのでケンカになる時もあるが、自分たちで決めたルールだから、皆、納得するそうだ。地域の為に真剣に話し合う大人の姿はかっこいいと思ったし、公園にいる子どもも大人もとても楽しそうに見えた。
僕は「皆のやりたいが皆を笑顔にする」素晴らしい取り組みだと思った。昨日、近くの公園で夏祭りがあり、皆とても楽しそうだった。僕は、公園はやっぱり人々の笑顔が似合うなと思ったし、公園に沢山人が集まるのは嬉しいと思った。これからの公園が、多くの人の笑顔であふれるよう、僕も自分で何ができるか考えて行動していきたいと思う。

「強い」と「上手い」

北野中学二年　峯元　陽向

強いと上手い。同じような意味に聞こえるこの二つの言葉を、明確に区別している人がどれほどいるのだろうか。かくいう私も、特に区別なく使っていた一人だ。この夏、この二つの意味の違いを考える出来事があるまでは。
私は剣道部に所属している。こんなに打ち込めるものに出会えたのは初めてだ。毎日、部活をするために学校に通っているといっても過言ではない。部活動見学で、初めて剣道を目にした日か

ら、私の中学校生活は剣道を中心に回っている。優しい先輩たちや元気一杯の後輩たち、厳しくも的確な助言をくれる先生方に恵まれ、私も先輩たちのように市大会で入賞し、県大会へ出場したいという目標ができた。そのためには、もっともっと強くならなければ！と練習にも気合が入った。おかげで、なりふり構わず、竹刀を振っていた一年前よりも、足の裏や手のひらにマメができた分だけ強くなれた気がしたし、腕や胴にできたあざはがんばった証のようで誇らしかった。

このように、一年間強さを追い求めた結果、この春に行われた所沢市青少年剣道大会二年女子の部で三位入賞を果たすことができた。これは、目標に掲げた「強さ」に一歩近づけた出来事であり、当時の私にとって、自分が「上手くなった」と錯覚する出来事でもあった。

これが錯覚であるとわかったのは、六月の所沢市学校総合体育大会の個人戦で、二年連続優勝を果たしている、他校の三年生のAさんと初めて対峙したときだ。Aさんが構えただけで圧を感じ、怖気付いてしまった。いつもならば、ぐいぐい詰める間合いも、そのときばかりは慎重になった。じりじり、鍔追り合いがどのくらい続いただろうか。最初に動いたのは私の方だった。今思えば、Aさんはわざとすきを作って私に面を打たせたのかもしれない。それを軽くかわしたAさんが、無防備な私の胴を狙っているのかのように見えた。私は、それを避けようと体をよじり、無理な姿勢となった。立て直そうと思った瞬間、面を打たれてしまった。「上手い！」と思ったとき、審判の旗は、全員一致でAさんの色が上がっていた。個人戦はAさんの三年連続優勝という結果で幕を閉じた。

観戦していた母が、私が面を打たれた瞬間を撮影していた。思えば、新型コロナ感染症のため保護者の観戦が制限されていたので、剣道の写真を撮ってもらうのは、初めてだった。その写真を見て、悔しさよりも恥ずかしさよりも、Aさんが面を打つ姿が「きれいだな」と思った。例えるなら、初段審査のために練習した形を見ているようだった。部活動見学のとき、先輩たちが背筋をピンと伸ばして素振りをする姿に感動したのを思い出した。私は、試合中にこんなにきれいな姿勢を保てていないことに気づいた。

試合で結果を残したのだから、間違いなくAさんは強い。しかし、ただ強いだけでなく上手いのだと思う。例えば、構え方、振り方、足捌き等、ひとつひとつの基礎をしっかりと身につけることが上手さであるとすれば、強さとはその基礎を土台として、自分に合った技や戦い方を身につけることではないだろうか。私は、結果ばかりにこだわり、基礎を疎かにしていた気がする。入部したての頃は、早く竹刀を振りたくて仕方なかったが、ひたすら筋トレ中心の指導が続いたのには、理由があったのだ。

私のように早く強くなりたいと思う人に言いたい。強くなりたければ、まず、上手くなれ！と。基礎が中途半端だと、見せかけの強さとなる。そして見せかけの強さはいずれ、限界がくる。結果に直結しないように思える練習でも、それはあなたが強くなるための土台となっているのだ、と。このことを自分自身にも言い聞かせ、初めて竹刀を握ったときの思いを忘れずに、これからも大好きな剣道を続けていきたい。そして、いつか周囲の人から「上手い！」と言ってもらえるような選手になりたいと思う。

小学生　佳作

楽しかった盆おどり大会	所沢小学校三年	荻原　響心
ゆめへのだいいっぽ	南小学校三年	関　結花
ＳＤＧｓとわたし	明峰小学校三年	何本　優衣
家族について	山口小学校三年	中沢　柊
ぼくの家族	東所沢小学校四年	神保　大聖
こんな職業になれたらいいな	北秋津小学校六年	本澤　星奈
その経験で新たな道は	美原小学校六年	長谷部　舜
友達の大切さ	東所沢小学校六年	原尾　真菜珠
私の友達	東所沢小学校六年	淵上　真妃菜
がんばりたいボクシング	東所沢小学校六年	渡辺　千夏

中学生　佳作

富士山の環境	南陵中学校一年	石川　徳人
部落差別問題	南陵中学校一年	大滝　美桜
将来の職業	南陵中学校一年	小堤　瑛太
合唱部に入って	南陵中学校一年	加々見　栞
私の将来の夢	南陵中学校一年	菅原　愛菜
できないをできるに	南陵中学校一年	須藤　樹里
少子高齢化をこどもの視点から	南陵中学校二年	髙木　朱音
大空への憧れ	南陵中学校二年	宮﨑　紡
将来の夢	北野中学校二年	神山　柳斗
家の鍵と、防衛費	所沢中学校三年	鈴木　晴太

【選考委員】　川﨑　英生（同人誌『文芸事始』主宰）
永窪　綾子（児童文学作家）

特選作品選評

選考委員　永窪　綾子

令和五年度「青少年―明日へのメッセージ」への応募は、小学生の部十八校六十八作品、中学生の部七校二百六十三作品でした。

新型コロナが少しづつ落ち着いてきた日常生活の中で、学校でも勉強やクラブの活動、その他いろいろな行事も復活してきました。でもこの四年間はだれにとってもたいへんだったと思います。考えてみると長い人生の中で、苦い思い出として心に刻むことも大切かも知れません。

おしくも入選しなかった作品にも、考えさせられる良い作品がたくさんありました。選考委員の川﨑先生ともよく話し合って選ばせていただきました。

【小学生の部】

ぼくにできるバリアフリー
所沢小学校四年　井上　晴馬

色覚異常という目のしょう害をもつ作者は、自分のしょう害を知ってから、パラリンピック選手が行うバリアフリー体験に参加したことを通じて、技じゅつや工夫を加えて周りの人の助けがあれば生活しやすくなることを学び、その輪を広げていきたいと、希望にもえている。しっかりとしょう来を見すえて前向きな考え方に心があたたかになり、関心すると同時におうえんしたくなる。

ぼくの知らなかった日じょう
北秋津小学校四年　小川　咲士

学校の福祉のじゅ業で、今まであまり考えることのなかった、また気づかなかったいろいろなところに、福祉の考えかたやせつびがあってエレベータ、スロープ、手すり、点字などもそのような考えによっていることを学んだ。そして、これからはちょっとした心くばりや気づかいでみんなが楽しい街になってほしいと願っている、という思いのこもった作品に作りあげている。

ものおじちゃん
東所沢小学校六年　菊地　快晴

ものおじちゃんとよんで親しんでいた、福島で農業をしているパワフルな八十八歳のおじちゃんがガンでなくなってしまった。でもおじちゃんが心をこめて育てたものの木は今年もあまくておいしい実をたくさんつけている。いろいろなことをたくさん教えてくれたおじちゃんとの思い出をずっと大切にしていきたい、というほのぼの心やさしい作品に好感がもてる。

【中学生の部】

空の色

南陵中学校一年　釼持　珀衣

今年の夏は猛暑酷暑の日が続きエアコンが手放せない日々。旅行に行った涼しいはずの北海道でも暑かった。でも、部屋からは青く広がる空が見えている。そんな日常の中で色々考えさせられた、世界各地で起こっている山林火災、ハリケーン、台風など、その多くが気候変動に起因していること、これから先、地球はどうなっていくのだろうか、自分たちが大人になっても青い空が見られるのだろうか、などなど。そして自分のできることを今から始めなければならない、という強い決意が伝わってくる作品に仕上がっている。

百人のぼくが力を合わせたら

南陵中学校二年　樋口　紋

作者は今二つのことにやりがいを感じているという。いずれも、大人に交って教えてもらいながら何年も続けている活動で、その一つは森林保全ボランティアに参加して自然を守る活動。二つ目は神社の寿々木流囃子蓮に参加して伝統を守る活動。両方とも「守る活動」で、守ることも大事なことだと、少年らしい情熱で語りかけている。ただ、いずれも人材があつまらないのが悩みのタネ。表題の「百人のぼくが力を合わせたら」という表題が作者の気持を的確に表わしている。文章もしっかり書けている。

友情とＳＤＧｓ

北野中学校二年　桑原　叶多

作者は幼稚園から小学校高学年まで間台湾で過ごした。帰国して何年かして、そのときに親しくなった友人が訪ねてきてくれた。そのことから台湾と日本と遠く離れていても、友情の絆が切れることなくつながっていたのだということに感動した。そして、その友人との会話の中から今世界で重視されているＳＤＧｓについて、二つの国の間で取り組み方の違いや、似かよっている点などを知って、改めてＳＤＧｓの大切さを考えるきっかけになった、と前向きな思考、姿勢を書いている。いずれもとても大切なことであろう。

毎月第３日曜日は「家庭の日」

毎月第三日曜日は「家庭の日」

忙しい毎日の生活の中では薄れがちな「家族みんなが温かくふれあう日」として、埼玉県・青少年育成埼玉県民会議では、毎月第三日曜日を「家庭の日」と定め、その普及を推進しています。所沢市・青少年育成所沢市民会議も、この趣旨に沿って、〈青少年―明日へのメッセージ〉と題した作文の募集や、新小学一年生へ記念品の配付を行っています。ぜひ家庭では、家族団らんの場を持ったり、家族で力を合わせたり、家族で地域の行事に参加するなど、「家庭の日」を意図的に実践し、それを習慣にしていきましょう。本当は毎日が「家庭の日」なのですけれど…。

子どもにとって家庭とは…

家庭は次のような役割を持つ、子どもの成長にかけがえのない大切な場所です。

くつろぐ　心身ともにリラックスし、明日に向けて、働いたり勉強するための力を蓄えます。

生きる力をはぐくむ　豊かな情操、思いやりの心、倫理観、助け合いの精神など、生きる力の基礎をはぐくみます。

文化を伝える　衣食住についての生活様式を始め、受け継がれてきた文化を親から子へ伝えます。